

<論文>柳田国男と高浜虚子：戦争末期における連句

著者	島本 昌一
雑誌名	日本文学誌要
巻	46
ページ	2-18
発行年	1992-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019649

柳田国男と高浜虚子

——戦争末期における連句——

島 本 昌 一

はじめに

昭和九年三月、雑誌「俳句研究」が改造社より創刊された。この刊行は二年前の昭和七年十月創刊の「短歌研究」が好評で、それにあやかったものであったらしいが、本誌もまた見事に時代をとらえ、好評を博することができた。

俳句は、現在でもそうであるが、結社によって発展している。本誌の意図したものは、その結社の閉鎖性を破り、交流と相互批判の場を提供すること、及び局外者の自由な発言を積極的に取り上げることであったと思われる。つまり初めての俳句総合雑誌の試みであったわけで、時代の雰囲気と相俟って、俳句に空前絶後の活気を与える事に大きく貢献した。そしてこのことは直ちに明治以来創造的な役割を演じ、昭和初期最大の権威であった「ホトトギス」と抵触することとなった。これまで

の俳壇は「ホトトギス」との関連で形成され、動いていたといってもよいだろう。

当時はその「ホトトギス」に対して俳句革新を目ざした所謂新興俳句運動が全国的に起ころうとしている時であり、本誌はこの運動を促進する役割をも果たしたことになった。「ホトトギス」主宰者虚子が本誌の存在を肯んじなかったのは当然であろう。

しかしながら新興俳句運動のさまざまな意欲的実験や自己主張も、緊迫した時局の中で昭和十五年にはあらかた弾圧され、本誌も昭和十九年には改造社が「自発的解散」を強要されたことによって、同年七月号をもって幕を閉じたのである。全一五冊であった。

この時代の異様なまでの俳句の高揚は、敗戦に向ってのめり込んでいく時代相と密接な関係があるだろう。好むと好まざるとにかかわらず人々は時局に捲き込まれた。行為している者自

らが絶えず自己の存在の意義を確かめ、生命を凝視しなくてはならない状況で、伝統的な短詩型文学は人々によって愛用または酷使されたのである。終戦前後の『俳句年鑑』^{注二}（昭和二十二年刊行）に登録されている俳誌の数だけでも三二〇種の多きに達している。

しかしこの雑誌について語ることは本稿の主題ではない。私事ながら筆者は戦後、外国文化偏重の時代に教育を受けた。伝統的なものを見直してみたいという回心が起こったのは、昭和三十年代であったと思う。そして最も日本的なものと考えられた俳諧に取り組んでみた。その折にしばしば活用したのが本誌であったわけである。今、研究史のため古い覚書をみながら、雑誌の総目次を作成してみた（『研究と評論』六回に分載予定、既刊、一九九一年度四六号、四七号）。

ここで主題との関連があるのは、その後、終戦までの俳句界の動向である。

一 連句的世界

「俳句研究」は日本文学報国会俳句部会幹事伊東月草が中心になって再興を図り、目黒書店から再行された。編輯方針も異なるということで四ヶ月後の十一月、改めて創刊号として出されたのである。混沌とした状況であるので整理しておこう。^{注三}

昭和十九年十一月（一卷一号）、十二月（二卷二号）、二十一年一月（二卷一号）、二月（二卷二号）、三月（二卷三号）、

四月（二卷四号、この号より戦後、昭和二十二年九月までB5判）、五・六月（二卷五・六号）、七・八月（二卷七・八号）計八冊で終戦を迎えた。

戦後は、昭和二十年十一月（二卷九号）、十二月（二卷十号）と始まり二十一年一月（三卷一号）よりは合併号はあるものの、ほぼ順調に戦後のスタートを切っている。

いずれも四十頁前後の薄い戦時版であるが、あえて創刊号と銘を打った特色を探してみると、次のようになるであろうか。

まず「俳句研究」という表紙の題字が虚子の筆であり、「国土礼讃」と題する彼の巻頭言で始まるのが注目されよう。次いで、『日本の短詩形文学』（昭和十六年）を著した長谷川如是閑の「民族文学としての俳句」という注目すべき論説が置かれている。

特に俳句は、特殊の詩的意識の所産であるよりは、一般日本人の生活意識の所産である故に、「詩それ自体」としての超越性をもたずに、民謡に於けると同じく詩を語るよりは寧ろ生活感情を語るのである。その意味で俳句は高度に発達した「民俗文学」である。

この論説で、俳句とあるも、これは連句のことである。「日本人一般の民俗的生活の感情情操による協同創作」が「民俗的心意の結合・強化の機能」をもっと強調されている。これに和して自由律の荻原井泉水が「和する心」という連句論を述べ、「西洋文学論には当てはまらぬ日本固有の庶民文学の行き方」として連句が強調されている。

このような論考を前提として、最後に文学報国会俳句部会は委員長柳田国男、高浜虚子以下二一名の連句委員の名で、趣意書と十一項目の「昭和俳諧式目」を掲載した。またここで予告されている必勝祈願奉獻作品は次年度の二月号に、更に三月号にはその注解が載るといった入念さであった。連句については改造社の「俳句研究」も力を入れてきたのであるが、その位置づけにおいて、この連句提唱は創刊号の最大の特徴であるといつてよいであろう。

勿論本誌には俳句・俳句論もみえる。とりわけ、中村草田男の「新『俳句研究』誌への期待」は、批評と批評精神の復活を主張して注目すべきものであった。

戦時統制が画されて以来、こゝ数年の俳壇には、批評及批評意識が殆ど終熄してしまつたかの観がある。これは、明かに統制の意味の理解の不消化か、運用の錯誤かを示すものである。

こうして「日本的なるものに復歸する」との名目の下に科学と思想との格闘から後退（圏点は筆者）すべきではないと決然とした態度を示している。しかし実際は伊東月草がいみじくも言つたように「時局俳句」を苦手とする俳人（昭和十七年俳句界概観）文学報国会編『俳句年鑑』昭和十九年）の苦しい時局俳句以外の余地はなかつた（勤労働員者の「生産俳句」や「生産俳句鑑賞」などで雑誌はやつと活路を見出したといつてよいかも知れない）。

俳句によるあらゆる実験的な作品や主張が終つた時、俳句は

その母体である連句に復歸したといつたらよいであらうか。

そしてこの短詩型文学の最後を看取つたものは「俳句研究」を肯じなかつた虚子と、俳諧文芸の理解に大きな貢献をしたとはいへ俳句（色紙文学）は嫌であるという柳田の両名であつたことは意味深いことであつた。

しかもこの兩人ほど戦後も自己同一性に住し活動が続けた者はいなかつた。虚子は「俳句は（この戦争で）何らの影響も受けなかつた」（『虚子俳話』序、昭和三三年）と傲岸ともいえる態度で戦後に身を処した。柳田はそのようなことは言っていない、しかし代りに戦争末期の私生活の記録『炭焼日記』（昭和三三年）を公表し、黙示的に自己の見解を公示した。彼の敗戦後の活動はまさに驚歎に価するものであつたが、その大いなる活動を支えていたものは、暗澹たる戦争末期に彼の見出した連句の世界「人の心を和らげる文学」であつたという（喜談日録「展望」昭和二十一年一月から四月まで連載）。

このあらゆる活動が不可能となり回歸した伝統の世界は、いかなる意味において戦後の出発点になるのであるか。以下、もう少し詳しく経過を追つて考察してみたいと思う。

二 虚子と連句——『俳諧』創刊——

虚子が力作「連句論」を発表して連句を擁護したのは明治三十七年「ホトトギス」九月号である。子規に対する遠慮があつた故か、没後二年目であつた。この年二月、日露戦争が始まつ

ている。虚子には伝統を墨守するというより、創意的に生かす態度が強く、この年八月号には漱石と共に連句の手法を生かして、一貫した意味を追う俳体詩の実験をしている。これもこの連句精神の近代的展開を意図したものであろう。連句について鳴雪や碧梧桐との論争が行われる中で「ホトトギス」は漱石の文学作品等稔り豊かな収穫をもたらしたが、虚子自身も小説へ関心を移していった。そして虚子が再び連句への関心呼び起こしたのは、日中戦争が始まった頃である。

昭和十三年「ホトトギス」五百号記念として刊行された雑誌「俳諧」が、その意図を具体化したものである。昭和十七年虚子は次のように回想した。

戦争の起る時は文運の勃興する時であるといふ説もあるやうであるが、夏目漱石の「吾輩は猫である」をホトトギスに載せはじめたのは日露戦争の真ッ最中であつた。又私達が写生文から小説に筆を進めたのも此日露戦争の時であつた。

わけでも連句の復興といふことは、いつも戦争に伴って起るやうな関係の有る事も面白いことである。私が前に連句論を書いたのは日露戦争当時であり、其に今度は殆ど支那事変と同時に連句の研究が始つて今日に及んでいるのである。

これは「ホトトギス」(二月号)に載つた「日露戦争の頃」と題するエッセイであるが、これは次のような含みのある言葉で始つてゐる。

日露戦争の頃は子規はもう死んで此世に居なかつた。子規は嘗てかう云ふことをいつた事がある。

「露西亜が日本に攻めて来る、といふ事よりも、死が自分に迫つて来てをると云ふことの方が、今の自分にはよっぽど痛切だ。」

と、さう云ふ事をいつたことがある。これは日露戦争の始まる二年前のことであるが、既に日露衝突の機運は犇々と迫つてゐた事と思ふ。その日露戦争の迫つて来たことよりも、自分に死の迫つて来てゐることの方がよっぽど痛切だと子規は云つたのである。

このテンポののろい文章で、虚子は子規に托して何を言おうとしたのであるか、続く文章をみても、明らかではないが、少くとも戦争讃歌でないことは確かであろう。むしろ生命の不安に晒されている人々の間で連句的関心が胚胎してくることを言おうとしたのではなからうか。

このようにして生れた「俳諧」^{注四}という雑誌であるが、虚子は昭和五年六月創刊の女性俳句誌「玉藻」を二女立子に主宰させたように、本誌は長男年尾に主宰させた。そこで虚子の仕事を考えるさいには、補足的に軽くふれられるにすぎない。しかしながら、連句の指導は虚子があたつており(主に文通による指導であつたらしい)、虚子を考察するためにもっと大きな比重を置くべきであろう。以下、雑誌の性格についてみてみよう。

昭和十三年四月創刊号は虚子の巻頭言「俳諧といふこと」で

始る。次に奈良鹿郎の「虚子の連句論を中心に」という論考があつて、虚子の連句論を要約して出発点としているので、その意図は明瞭であるが、虚子の巻頭言はもつと広いものであつた。目次の分類をみると、次のような分類項目が立てられていることがわかる。

「俳文」「俳諧詩」「HAIKAI」「連句（創作）」「古俳諧（研究）」「俳画」つまり、巻頭言で虚子が「俳諧国」と呼んでいるものである。

俳文は明治三三年頃より子規を中心に開かれた文章研究会「山会」の伝統を引いており、俳諧詩は漱石と試みた俳体詩の流れを汲んでいる。HAIKAIは外国の詩人（俳人）との俳句創作・交流で、とりわけ昭和十一年二月から六月にかけての虚子渡仏によって強化されたものである。俳画もまた中村不折、下村為山等との交歓によって生れた作品であつた。してみると、これらはこれまでの「ホトトギス」が創造的・実験的に生み出してきたものであることがわかる。それらすべてを雑誌「俳諧」に托し、その発展を期待したのである。

赤星水竹居、麻田椎花、阿波野青畝、池内たけし、池内友次郎、大岡龍男、大橋越央子、川端茅舎、京極杞陽、斎藤香村、佐藤漾人、皿井旭川、柴田宵曲、為成菖蒲園、富安風生、中村草田男、中村汀女、奈良鹿郎、林大馬、深川正一郎、福田蓼汀、真下喜太郎、松尾邦之助、松本たかし、山路閑古などが活動した。

画家では、石井柏亭、牛田鶏村、小川千甕、川端龍子、酒

井三郎、下村為山、津田青楓、三上知治といった人物が作品を出して活動した。

しかし雑誌は創刊の頃は、必ずしも永続を期待してはいなかったらしく、また昭和十三年より十六年までは年二回の刊行であつたが、時代の要求を捕えたらしく昭和十七年三月よりは、一回合併号があるも、毎月の刊行で、昭和十九年四月、三三号にいたつた。時は戦争の末期であつて、紙材不足と戦時統制のための俳誌統合指示によって、次号より「玉藻」と「俳諧」は再び「ホトトギス」に統合されることになったのである。同誌の一隅に「俳諧三四」といった具合にバックナンバーを付して同居した。

戦後逸早く「玉藻」は独立（二十一年九月）したのであるが、本誌は独立を願ひながら、ついに自然消滅したと考えられる。虚子が老年になり、長男年尾の負担が次第に大きくなつてきたからであらう。虚子は明治七年生れ、柳田国男より一歳の年長であつた。そして昭和二六年三月、絶大な体力を必要とする「ホトトギス雑詠」句選は年尾が担当することになった。以後もとぎれとぎれに「俳諧」の頁は存在したが、同年十一月、「俳諧」百三号をもつてあとは確認していない。したがって少くとも同誌は形式的には一〇三回刊行されたことにならう。統合後の記事は殆ど連句に関するものであつた。

連句に関しては、虚子の捌きによる創作、その解説、芭蕉、蕪村の古俳諧研究（主に輪講）、座談会を含む連句論等であるが、ユニークな連句練習方法として「二句の連句」という付

合、虚子一門が卷いた未完成の連句に毎月、短句、長句と付句を募集して選句し、かなり長い時間をかけて歌仙一卷の仕組を理解させていく「付句練習」があった。これは人気があって、捌が、年尾、大馬、鹿郎と変えることはあったが、最も長続きた。柳田は専ら折口一門と練習を積んでいたようであるが、虚子一門と他流試合をする頃には柳田が押しまくられる程の熟練の士が「俳諧」の囲りに育ち、京都、名古屋等に支部も生れていたものであった。

柳田はこの他流試合にそなえて本誌をよく読んでいたらしい。昭和十九年五月十二日、虚子一門との会合では、「初手合せ」と言うことになりそうですね」といい、折口信夫や加藤守雄にこの雑誌を紹介し、必要なところはチェックしたので前もって勉強しておくように加藤に渡したという。十二日鎌倉香楓園での柳田の対抗意識ぶりは『わが師折口信夫』（加藤守雄）に面白く活写されている。ただ後の「俳談」（俳句研究）昭和三十五年四月より七月）には、冊数その他混乱した記事がみえるが、しかし『炭焼日記』五月二十九日に「高浜年尾君より「俳諧」旧号揃えて送ってくれる。それを読む。」とある。同月には本誌は三三冊すべて刊行されているので、柳田は再び全巻に目を通したことになる。両派の交流は次第に密になってきた。年尾著『俳諧手引』（創元社百花文庫）は戦後二十一年の刊行であるが、柳田の推輓によって戦前に刊行予定のものであった。

「俳諧」の連句研究の中核は、高浜年尾を中心とした主に関西

在住の同人、山岡三重史、高林蘇城、鈴木涙雨、林大馬、山田九茂茅等の輪講にあらう。これに皿井旭川、奈良鹿郎、阿波野青畝等の先達が補佐をした。芭蕉と蕪村の連句の差異など聞くべき意見が多い。しばしば行われる座談会でも、たとえば、子規の連句非文学論をコミック、ユーモアといった面から考察しなおす（俳諧遊戯論）といったユニークなみなおしが行われている。いま継続した論考のみを注記しておく（「談林の心附」（九号）「附合に就て」（十号）いずれも林大馬、このように表題の変わったものは割愛した）。

連句関係論考

- | | |
|-------------------------------|-------|
| 冬の日連句輪講（霜月やの巻、追加二〇―二五号） | 年尾編 |
| 猿蓑輪講摘抄（発句、一―五号） | 年尾編 |
| 猿蓑輪講摘抄（きりぎりすの巻、五、一五―一九号） | 年尾編 |
| ひさご輪講摘抄（花鳥の巻、六―九、一二、二三号） | 年尾編 |
| 炭俵連句輪講（振売の巻、一六―一九号） | 年尾編 |
| 炭俵連句輪講（梅ヶ香の巻、二六―三〇号） | 年尾編 |
| 続猿蓑連句論講（八九間の巻、三十一号） | 年尾編 |
| 几董の『附合てびき蔓』（六号） | 奈良鹿郎 |
| 蕪村連句輪講（牡丹の巻、七―九、一二―一四号） | 年尾編 |
| 歳時記脚註（二―二八号） | 真下喜太郎 |
| 「連句入門」略記（九、一八―二〇号） | 年尾 |
| 連句雑記（二―二七号、なお合併後も八回続く） | 年尾 |
| 俳諧雑記（八―一二号） | 奈良鹿郎 |
| 連句座談会（全八回。七、三、三、四、五、一八、二八、三三） | |

連句創作に関しては虚子の捌きに依る作品二七が掲載され、そのうち一七については解釈がつくという熱心な雑誌であった。

三 「ホトトギス雑詠選」

連句については、雑誌「俳諧」に関連した見解や座談会が「ホトトギス」でも組まれているが、このように「ホトトギス」の重要な達成を他に譲りながら、虚子が最後まで守り抜こうとしたものは何であつたのだろうか。それは「ホトトギス」の雑詠選であつたと思われる。雑詠というのは、明治四一年十月号で始め（翌年七月号まで中絶した）、それ以後ずっと継続している虚子の創意になる選句方法である。昭和二六年九月号の「所感」（講演の記録）において、その新しさというのは、課題を出して句を募集するという従来の形式ではなく自由な題で句を募り、選句するという方法であるという。爾来、他の雑誌にもこれは普及したが、私（虚子）に嫌らない人はわざと「雑詠」という文字を避けようとするが、やはり内容は「雑詠」であつて、『雑詠』とは題を課さないで句を募集し選抜するという単純な意味であつたのでありますが、それに何か特別な重い意味が有るやうになって来たのであります。」といっている。

ホトトギスの雑詠を選むのには、少くとも二週間の日子はかゝると思ひます。其位の分量はあります。もっと少ない日数で選もうと思へば選めない事はなく、十日でも一週間

でも、すまそうと思へば済ませない事はないのでありますが、念を入れて選ぶ場合は、どうしても二週間の日数は必要だと思ひます。既に相當な技倆のある作者の句を選ぶ場合は比較的容易であり又興味もありますが、いまだ幼稚と思へる人の作を調べて行くのは中々困難で又退屈で、相當な日数がかかります。無名の作家のうちから、秀でた句を見出すといふ事は砂礫の中から珠を拾ひ出すやうなもので、困難ではありますが、併し乍ら又愉快なことであります。又、それを見出すことが雑詠の選者としてのつとめでもあります。人々をして、各その途を得せしめて、其人の赴く可き所に赴かしめる、といふ事は、選者のつとめであると同時に、此の無名の人のの中から新人を見出して来るといふことも亦た其の務めでありませう。

「特別な重い意味」といふのは新人発見の機能をさしていう。虚子の新人発見の力はこの句選から生れ、「ホトトギス」を最高の權威に高めしめるものであつたが、これは戦時中も最後まで放棄されなかつたものである。戦争のため次第に薄くなつていく「ホトトギス」はこの雑詠と戦地や旧植民地、ハワイ、ブラジル、オーストラリア等の移民地からくる便り、それに虚子の「句日記」と短い論説・消息に限定されるようになった。その論説をいくつか拾つてみよう。

「花鳥諷詠ならびに写生といふことを反覆する」（昭和十九年五月号）では、「いつまでも写生と花鳥諷詠ですな」という意見に対し、「それで結構なのです。」と答えているといつて、次

のように時局とのかかわりを主張する。

看板を新しく塗替るといふことは政治的の意味が含まれてゐることであつて、時の勢を察して其を迎へ新しく看板を塗替へるといふことをするもの、やうである。それよりも、いつ迄も同じ信条を守り、深く其意味を探求して行く方が私の心にぴたり当嵌るのである。信条といふものは繰返し／＼反覆することによつて理解が愈深くなつて行くのである。

こうして敬虔な心を以て自然界人間界に接する花鳥諷詠が再び主張される。そして、

附けていふが、今日戦陣にあつて句をつくる人でも、又職場にあつて句をつくる人でも、諸君の身邊を包む四季の現れ（季題）に敏感であつて、写生のわざに忠実ならんことを切望するのである。

次の六月号をみると、「立派な句」と題して、自分の選句の基準を説明している。

俳句雑誌を編む者は一に立派な俳句が寄せられることを望み立派な俳句を選ぶことを念願してゐる。ホトトギスには戦地から寄せる人が殆ど毎号千人を算するが、それもよいと思はれる句は採り、悪いと思はれる句は止むを得ず捨てる。そして誌上に於ては戦場からの句だからと言って何等特別の待遇はしない。職場に働いてゐる人の句も同様であり、農村に挺身してゐる人の句も同様である。

作品選句の基準は時局との関係ではなく、「花鳥諷詠」の深

さであるというわけであつて、余裕のある態度であるともいへよう。

俳句は感傷に溺れていては生まれえない、一旦それを否定して即物的に囑目の事物を凝視することから生まれる。そこには宗教にも似た達観があるであらう。「ホトトギス」の雑誌には直接的に戦争を反映するものは比較的少く、他の俳句専門家が無理にひねり出した「時局俳句」の重苦しさがないことが特色であるといえるかも知れない。

戦地からの便りにおいても同じようなことがいえる。

小生新聞記事を賑はしました江北大殲滅戦に参加しました無事帰つて来ました。今度は山又山の追撃戦でありましたので、逃げる敵の方もつらかったでせうが追つかける私達も苦勞をしました。敵以上の苦勞をしない事には敵を捕へて殺すことは出来ないだろうと思つて耐へて行きました。廿日間山を登り谷を渡り徹底的に敵を相手の健脚競争でありました。殆ど休みなしで百里以上を歩き通しました。

（昭和十四年八月号）

以上は長文の一部であるが、この文通者は、追撃が余りに急で逃げるひまもなく、「子供を抱いた女が道ばたに坐つたま、でポカンとしている」様子、「自分の前に櫟や榎の枝を地に挿して掩蔽として抵抗してゐたのが既に骸となり、枝の青葉がうちしほれてゐる」姿に「敵ながら哀れ」を感じたという。「戦地より其他」の文通欄には意外に怒り・憎しみはなく、出征したことを運命と諦観した人々の、素朴な声が聞こえてくる。

もう一つこの頃しばしば問題をかすものは季題であつた。

旧植民地にも移民地にもその土地固有の季題があろう。虚子は台湾には台湾固有の歳時記が必要であるという主張に対して、理解を示しながらも、

日本本土に興つた俳句はどこ迄も本土を基準として、本土に生れた歳時記を基準として、其歳時記は動かすべからざる尊厳なるものとして、熱帯の如きは一括して「夏」の季に概当すべきものである。さうでないとい内地の季題は混乱を来して收拾すべからざるものになる。(昭和十八年四月「熱帯季題について」)

すると人々は戦地であらうと、植民地であらうと日本の歳時記で事物をみ、虚子の「句日記」を通して国土を知るといふことになるであらう。

昭和十八年古稀を迎えた虚子は、この戦地、旧植民地、移民地から寄せられる彪大な雑詠と便りを読み、句選することを自分の天職として実行したのである。近代的芸術家の姿勢ではなかった。これが日本庶民と共に生きたという実感を虚子に与えた。彼が戦後傲然として一貫性を持して譲らなかつたのはこのためであつただろう。

柳田は人間には「二代目になる人と、初代を立てる人と、人間の性質にあります、どちらかといへば、虚子は二代目型でなく、初代の型です」(「俳句研究」昭和二十三年九月「成城連句座談会」)といつて、虚子のスケールの大きさを認めていたが、日本の庶民の心を知り尽くしているというその主観的信念にお

いて、柳田と共有するものがあつたように思われる。

四 「昭和俳諧式目」と「唯祈るの巻」

瞥見を終えたところで最初の問題に帰ってみよう。

柳田国男が連句の実作を試みたのは、そんなに古いことではないと思われる。記録からは「東北車中三吟」(「俳句研究」昭和十六年八月号)であらう。これは同年五月、十三日から二三日間、東北民謡試聴団団長として旅行したさい、折口信夫、土岐善麿とで巻いた三吟である。その中の一つには自注がある。

秋田よりの車中での連句という。その頃は式目も十分理解していなかつたというが、それから俄然連句の魅力にとりつかれたらしい。戦前は殆んど折口一門との交流であつたようだが、両者の全集、年譜等を一見しても十回を超える。従つて虚子一門との接触は初めての他流試合であつた。『炭焼日記』『わが師折口信夫』(加藤守雄)等によると、連句委員の交渉に來たのは、彼も文学報国会委員であつた折口であつたらしい。伊東月草が折口に依頼したのであらう。

昭和十九年五月十二日、鎌倉香楓園で高浜父子、久米正雄等と初顔合、後の柳田の回想では、規則を簡素化し法三章でいこうと話合つた。三十一日、規則相談会。委員は全二一名であるので、この間に他の委員への折衝があつたであらうか。七月三日の連句委員会は欠席者が多かつたと『炭焼日記』にみえる。しかし九月一日には正式に定まつたらしく電話連絡を受け

ている。

これは「昭和俳諧式目」と銘を打って「文学報国」(三六号、九月二〇日発行)に発表された。本則五章、細則六章。委員会の趣旨は、連句は明治以後西欧の文学観によってその文芸的価値が疑われて以来、国民の関心を失いつつあること、および今日の国民一般、「差当」では特に白衣の勇士並びに前線の勇士たち」にも気安く鑑賞・創作の道を開くためであると言う。委員は柳田国男を委員長として高浜虚子以下二一名である。^{注五}

この式目は伝統的式目を簡素化した常識的なものであるとも言えるが、委員の一人井泉水は戦後二一年の論説「連句の世界」(5)「俳句研究」(九月号)で、「昭和式目」などと銘を打つほどの新しい項目は何一つないと言い、式目一切無用論者として、決議委員会に欠席した理由を弁明している。また頼原退蔵は近代芸術たらしめるためには、一般的な心得だけでよく、「月、花の句は古式に従ひ、二花三月を定められたる座に出すが適当にして、恋の句亦古式に従ひ、各折に一所以上出し、二句及至三句を続け、一句にては止むべからず。」といった細則は全く必要がないと言う(「新連句提唱」(「学苑」昭和二三年二月号)。その通りであろうと思う。

ところで柳田のために一言すると、彼がこのような細則を主張したのではないかと思われる節がある。『連句手帖』には、式目を検討した跡があり、「問題」として「恋にも座を定むべきかのこと、又は「あたり」、たとえば名残表の前半など」とあって、自然句だけでなく恋の如き人事句にまで定座や出所を

吟味している。青年男女が戦争で引き裂かれていた当時を思うと、そのような情を恋の句として作品に留めさせたいという願いがあっても知れないと思うが、「恋句」の何たるかもわからない前線の勇士に、前述の如き複雑な恋句の規定を与えても役に立たないだろう。本式目は中途半端の譏りをまねがれぬものであった。その意味では、高浜父子が解説で対比している松永貞徳の式目観にはるかに及ばないものであった。これは作者の問題であると共に権威主義的報国会のもつ限界でもあろう。

次に「唯祈るの巻」についてみる。これまでこの作品への言及は、甚だ漠然とした理解に基づいていたのではないかと思われる。またこの作品にふれた柳田の回想「俳談」は八六歳の折の口述筆記であって、しばしば混乱し、矛盾したことが述べられている。ここではこの作品理解の前提についてのみ述べておきたいと思う。(季・月・花・恋の注記は筆者)

唯祈る月明くとも暗くとも

虚子 秋月

その盛り待つ黄菊白菊

柳叟 秋

めぐらせる山々も亦粧ひて

月草 秋

大きな籠を抱へ来る人

漾人 雑

望まれて昔の事を語り草

同 雑

思ひ立ちつ、紙帳つくらふ

虚子 夏

ぞろ／＼と鼠の殖えしきのふけふ

月草 雑

何かにつけてかばふ嫂

漾人 雑恋

似合はぬと知りても派手の恋衣

喜太郎 雑恋

菌採かや打ち連れて行く

月草 秋

こゝに来て覚えし花は鳥かぶと	正一郎	秋
アイヌの老とエトロフの月	虚子	秋月
船着かぬ日は人通りなきことも	月草	雑
いひ訳きかぬ子を叱る声	漾人	雑
くらまぎれ篠つく如き雨の中	同	雑
生臭ものを寺に持ち込む	喜太郎	雑
とりぐに草履なまめく花の客	追空	春花
比叡の方より春の神鳴	喜太郎	春
近江路は菜種畑の土ぼこり ^{ニオ}	柳叟	春
眉目何となく品のある馬士	漾人	雑
うき人の顔に提灯ふりかざし	同	雑恋
今は白痴の子を守りて住む	年尾	雑恋
村中に沢庵匂ふ頃となり	月草	冬
ゆかりが無くて訪ね来る客	正一郎	雑
貸本屋上り框に話し込み	虚子	雑
敵を追ひて掛川の宿	同	雑
よろこべば白髪の面美しく	正一郎	雑
月の床儿にがくと仰向き	年尾	秋月
上野なる蓑虫庵の秋いづこ	漾人	秋
夢は覚めがち露霜を聞く ^ウ	月草	秋
うちたへて鼓しらぶることもなし	正一郎	雑
鉄兜負ひ並びてぞ行く	漾人	雑
ぬかるみに映る火の手のすぐ消えて	年尾	冬
ひとすぢの道よし遠くとも	月草	雑

国の花今を盛りと咲きみてり 漾人 春花
 この慶びにかなひたる春 正一郎 春

この歌仙の成立事情を理解するには五つの資料、「必勝祈願奉獻連句・奉獻連句について（虚子、柳叟、漾人、年尾の短い感想）」（『俳句研究』昭和二十年二月号）、「『唯祈』の巻略解」（年尾、同三月号）、「必勝祈願略解」（虚子「ホトトギス」昭和二十年二月号）『炭焼日記』、「昭和十九年十月一日連句」と題する柳田の手控え（『連句手帖』）が存在する。

高浜父子はこの歌仙は四回にわたって巻いたものといっている、それを追ってみることにしよう。

まず第一回は年尾は九月末日といい、柳田は十月一日といっている。柳田はこの神宮奉納連句は自分がいい出したことで、いやがる折口信夫を誘って出かけたと後でいっているが、日記によると、九月二七日に連句委員会第三次が開かれ、高浜父子とも会っている、その頃、奉納歌仙の話が具体化したとすれば、両者矛盾しない。正確な日付は十月一日であろう。

十月一日、日曜なれども戦勝祈願の連句の為に、永田町の文学報国会に集まる。高浜、佐藤（漾人）、伊藤（伊東月草）の三君のみ、ややおくれて折口君来、八句まで進み五時半別れかえる（炭焼日記）。

したがって、五人で八句まで巻いたことになる。九句目は此日きていない真下喜太郎なので、この通りであろう。第二回目も日記で明確なようだ。

十月三十日、九時に家を出て文学報国会、連句第二日。高

浜氏の外、伊藤（伊東）・真子（真下）・深川（正一郎）
・佐藤・年尾君、折口君ややおくれて来る。五時までここに在りて名残の表第一句まで（炭焼日記）。

ところが、『連句手帖』の柳田の手控は名残の三句まで記入している。これは自分の句案等を記したもので出席していなくてはできないものであろう。すると実際は名残の表三句まで当日進んだものと思われる。この日の出席者は八名。「俳談」で繰り返し流派の恐ろしさと虚子の選句力を称賛するのはこの一日のことではなくてはならない。

第三回は高浜父子ともに敵機来襲といい、近くのビルディングの地階へ待避したといっている（佐藤様人だけがこの襲来を第二回のこととしているがこれは誤記）。その薄暗い待避所の中で虚子は「かういふ句が出来ました。これで附けて見ませうか。」と言って、「敵を追ひて掛川の宿」という短句を示したという。前句と付けてみると、前句の貸本屋は仇討のやつした姿だということになろう。B 29 に対しユーモアをもって応じたことになろうか。年尾は警報解除後あと二句続けたといい、この日は十一月一日だったとする。ところが柳田の日記は、この日「きょうも古日記にかかつらいて日を銷す。連句の会はさぼり了る。」とある。差合批判にうんざりして出席しなかったことになろう。折口信夫も行った様子はない。

第四回目、この日の捌きは年尾と明記されている。虚子は疎開先から出てこれなかったとし、その日を年尾は十二月一日としている。これでよいのであろうが、柳田は十一月二十二日

に、連句の会はこの月三十日にあるという電話を得ている。多分その時、出席を断った（また折口も同調した）。後は身内なので虚子は長男に指揮をとらせることにしたとも考えられる。勿論十一月三十日にも十二月一日にも連句の会の消息は柳田の日記にはみえない。こうして十二月六日に「伊東月草君来、俳連歌完成、明後日献納とのこと」と知らされても「是もよし」と他人事のような反応を示し、八日の奉納の式にも参加しなかった。

もし以上のようにみることが可能であるとすると、虚子が門弟の差合批判を振り切って柳田、折口各一句ずつを採って顔を立てさせたという虚子の選句力は、第二日めの十三句の中ということになるだろう。

比叡の方より春の神鳴

近江路は菜種畑の土ぼこり 柳叟

名所に名所で応じた付けであるが、旅の体験の深さが窺える柳田らしい句といってもよいだろう。

生臭ものを寺に持ち込む

とりぐに草履なまめく花の客 迢空

前句は破戒僧か悪僧かが連想に浮かび、付けにくい句であるが、これを花見時分の寺の風景に転ずるには詩人的ウィットが必要であろう。

ここに来て覚えし花は鳥かぶと

アイヌの老とエトロフの月 虚子

この前句も同様に付け難い。それを熊狩の毒矢のためにとり

かぶとを庭に植えているアイヌで転じた。これぐらいの力量をもっているのはここでは虚子と折口ぐらいであろう。しかも空の句は「とりかぶとの花」が花の句にならないことを知っていて、花句として付けたのであるから技巧の上からもすぐれている。虚子にはすぐ見分けがついたのであろう。選句は投票に依り、その上での判断は虚子が行ったらしい。句は清書して連衆に示されるので筆蹟からは識別はできない。実際、虚子の選句眼は群を抜いたものであったと思われる。

連句は世間話が芸術に昇華したものであるから、統一したものは求めることは出来ないが、それでもこの作品の表三句と名残裏には祈願作品らしいところが窺えよう。発句は虚子らしい時局への対し方を述べたものであり、亭主役の連句委員長・柳田国男はそれを菊花の咲き句うのを待ち望む人の心で受け、世話役の月草は紅葉した周囲の山々の自然美を借りて転じようとしている。まずは穏やかな祈願であらう。名残の裏は年尾が戦捷祈願にふさわしく戦時色を出しながら巻き納めようとしたものであろう。

しかし全体に気分がぎくしゃくとしたものを感じるのはこの歌仙のもつ前述の特殊事情故であらう。恋の句をみってみる。

何かにつけてかばふ 嫂 あによ 漾人

似合はぬと知りても派手の恋衣 喜太郎

適齡期を過ぎた娘の心根に兄嫁は何かと同情を示している。何世帯か同居している手狭な家での小さな出来事を恋句に仕立てた。

うき人の顔に提燈ふりかざし 漾人
今は白痴の子を守りて住む 年尾

前句は気性の激しそうな女性である。恋をし、子を生み、男に捨てられたらしい。今は生んだ白痴の子と淋しく二人で住んでいる。

初折と名残の折では恋の内容は当然異なる。しかし序破急の破の部分での恋は、白痴の子を育てる女性の淋しさである。意表を突く恋句ではある。しかも打越の「眉目何となく品のある馬士」と物語り的につながっているようにもみえる。

そしてこの両恋句ともに付けるのに一ヶ月の時間をおいている。「昭和俳諧式目」の恋の句また「二句にては止むべからず」の規定は甚だ重いものであったらしい。両回とも付けわずらい時間切れになり、次回廻しになったようにみえる。

さて柳田は彼が出席しなかった十二月八日神宮奉納の頃から、憑れたように芭蕉連句に沈潜し、終戦を迎えることになる。空襲が激しくなり、自由に歩ける時勢でなくなったことにもよるであらうが、それだけではなかっただろう。柳田がこの連句の会を途中から放棄したのは多分にお山の大将的な彼の性格にあっただろう。虚子門下の若殿原に伍して差合をもみあうことを彼は潔しとはしなかった。しかしこの他流試合は彼に自分の求めているものはこれと異なるという反省の機会をも与えたように思われる。それは配列順序からみてその頃のものかと思われる『連句手帖』の「点取は連句墮落のもととなること。自分などもすることながら一句をとりたててもてはやすべ

きものに非ず」といったメモが散見することからも窺われよう。

ここでは「予が俳諧論」と題する注目すべきメモを取り上げてみよう。これは単なるメモではない。最初に出てくる笑驚隊は荒鷺隊のパロディーで「笑わしたい」という多分、寄席芸人など篤志ある者の慰問団であろう。世の中が苛立ち荒んでくると、それは単なる駄洒落やくすぐりと思っても、その提供される笑いに救われたようなものを感じる。柳田はその笑驚隊の笑いも慰めにならなくなりつつあるこの時代に、笑いとは何かと自問自答しながら考えているのである。

○笑驚隊 名はいやしけれど志はよし

○どうして又あのやうなくすぐり

○もっと上品に人をたのしませることは出来ぬものか

○育ちが悪いから、金をもらふ笑はしを無料で奉仕するだけだから

○全体に日本の笑は職業になって退歩した

○職業では自分の頭も叩く

○そんなことまでせずに昔の人は笑わせて居

○尤も笑ひが乏しい世の中では小さなことでも笑ふ

○たとへば古今集の俳諧歌

○今日のやうに人が尤もまじめに固くなって居る際は笑はす

ことは実は難事に非ず

○自分も損はず傷けずに

○又は皆と共に笑ふ

戦後、昭和二十年十二月に書かれた『笑の本願』の自序をみると「いわゆる笑驚隊の篤志の活動も、もはや功を奏しがたくなっていた際に、実はその若干のものを一巻の書にまとめて、非常時用の読物にしてみようか、という気持ちに私はなったのである」とみえる。日記と対照すると、第一回目の連句会の行われた十月一日から三日後の十月四日、『笑の本願』の原稿仮にわたす」とあるから、この頃の心境を叙したものであろう。「予が俳諧論」は柳田の感情の流れがよくわかるメモであった。

彼はしばしば「をかしくなければ俳諧にあらずと私は思ふ」と言う。俳諧史の常識であるようだが、果してそうであろうか。発句だけを創作しては決して出てこない言葉ではないだろうか。連句的体験があつて始めて言える言葉であろう。「予想の付かぬことが俳諧連歌の特色」とも言う。彼が使う滑稽、新しさ、珍らしさ、共感、同情といった言葉は付句の体験の中から生まれてくる。笑いのあり方を通して、人と人のあり方が柳田の念頭を離れなかったであろう。「予が俳諧論」にはもう一つ、俳諧史との対話がある。いま全文の引用は避け、その終りの数項目を挙げてみよう。

○談林もこの趣意は知って居た

○たゞ予想外といふものだけにあまり力を入た

○人を驚かすを詮とす、驚きと笑とは全く別のもの

○それよりも人の心を安めること、安らかな笑ひ

この最後のものが芭蕉の俳諧であろう。沈潜して芭蕉の連句

を再度学び直して、笑いを深める道を模索しようとしたのが、敗戦までの柳田国男の生活であった。柳田の連句研究の過去は深い、我われはもう一度その林に分け入ってみたい誘惑にかられる。

注一 『俳句年鑑』（桃蹊書房）は昭和十九年二月と二十二年八月と二冊刊行されている。

前者は日本文学報国会編集で十七、八年頃までの、後者は終戦後の刊行で、十九年から二十一年までの俳句界の動向が識されている。

注二 「俳句研究」は、本文のように昭和十九年十一月創刊で戦後も継続されたが、目黒書店廃業のため、二二年七・八合併号より二三年十二月までは巢枝堂書店、二七年四月よりは俳句研究社から刊行された。そして昭和三七年一月よりは、昭和十九年十一月号を創刊号としたのは、政治的圧力によるものとして、改造社時代から巻数を数えなおし、翌三十八年十二月号を「俳句研究三十年記念号」とした。それには松井利彦氏の労作である三十年間の「評論総目録」が掲載されている。この目録には昭和二十年四月から六月までは雑誌は刊行されなかったようになっている。あるいは確認できなかったからかも知れないが、四月号、五月・六月合併号と二冊刊行されている。

なお雑誌は昭和五三年一月より俳句研究新社、六一年一月よ

り富士見書房より刊行されている。

注三 連句に対する虚子の発言はこれ以前に「ホトトギス」明治三二年五月号巻頭論文として「聯句の趣味」がある。この当時子規はまだ生存中であつた。俳体詩については「俳諧（六）」として三七年八月号。本論は同年九月号に「芭蕉翁付合集（蕪村選）」とともに附録として載る長編である。『高濱虚子全集』第十二卷（毎日新聞社、昭和四九年）「連句論篇」および『俳誌「ホトトギス」と愛媛』（愛媛文化双書34、昭和五六年）所収の深川正一郎・清崎敏郎両氏の対談が虚子の連句にふれている。

注四 「俳諧」は表紙に「HAÏKAI」（はいかい）とフランス語が入り、海外との交流も視野に入れたユニークな雑誌である。この研究が進んでいないのは大学図書館・一般公共図書館に全く所蔵されていないことも一因であろう。俳句文学館に三三冊蔵、三号欠。近代文学館に四冊所蔵されている。

筆者蔵若干冊。ただし、三号（昭和十四年五月刊）未見。

注五 連句委員会設立の「趣旨」と「昭和俳諧式目」を参考に掲載する。

（趣旨）、連歌俳諧の附合の呼吸は、日本的和の精神に立脚し、ひろく日本文芸を貫く源流の一つであり、連歌が俳諧となり、更に連句となって永く国民文芸として栄えて来たのでありますが、明治以後西欧の文学観によってその文芸的価値が疑はれて以来、僅に限られたその道の人々に愛好せられつゝ、余命を保つにとどまって、一般国民の関心を失ひつゝ、あ

ります。もしこのまゝに推移すれば、千年の伝統を保ち、常に民族精神の源泉となつて来たこの国宝的文芸が滅亡するかも知れない情勢に立至つて居ります。最近各方面に期せずして愛好者が現はれ五人七人宛一団となつてその研究と創作に志しつゝあるのは、連句の国民文芸的性格として蓋し必然の現象といへるのでありますが、此際本会が中心となつてかゝる氣運を一段と活潑にし、その振興發達をはかると共に從來徒らに繁雜に流れてゐた式目の類を時代に適應するやうに改めて国民一般差当つては特に白衣の勇士並びに前戦の勇士たちにも氣安く鑑賞し創作することのできる道を拓くことは、戦時下国民精神作興の一助として洵に意味浅からぬものありと信ずるのであります。依つて茲に委員会規程による連句委員会を設置し、連句の振興方策を協議し且つ斯界を統制してその振興發達を促したいと思ふのであります。

(委員) 柳田国男(委員長) 高浜虚子 荻原井泉水

折口信夫 久保田万太郎 久米正雄 土岐善麿 榎山梓月
能勢朝次 富安風生 水原秋桜子 野村愛正 穂積忠 麻
田椎花 佐藤漾人 松本たかし 高浜年尾 奈良鹿郎 真
下喜太郎 深川正一郎 加藤守雄 伊東月草

昭和俳諧式目

日本文学報国会
連句委員会

○俳諧(連句)は日本伝統の文学にして、その一卷に於ける、発句はもとより、脇句以下の附句も、各々一句としての独立性を有し各句間に於ては調和と變化に留意して、発

展性あるものたるべきなり。

○附合の捌き是指導者の裁量に待つべし。去嫌に関しては、似寄りたる事柄及び言葉を避け、句形相似たるもの亦避くべし。

○連衆は一座の芸術的興奮を尚び、常に即吟を心がけ、時間を守り濫りに一座の空氣を妨ぐる如き動作あるべからず。

○兩吟、三吟、四吟の場合は順により、連衆多き場合には出がちと為すべし。

○新らし味は俳諧の華にして、昭和俳諧の根本理想の確立を本義とすべし。

※

○俳諧(連句)は歌仙を以て標準とす。

○季の句は、春、秋は三句(但し五句迄は差支へなし)夏、冬は一句(又は二句)に止む。

○月、花の句は古式に従ひ、二花三月を定められたる座に出すが適當にして、恋の句亦古式に従ひ、各折に一所以上出し、二句乃至三句を続け、一句にては止むべからず。

○表六句は、成るべく穩かに運ぶべし。

○脇句の留字は、古来体言留と規定されしも、必ずしも拘束すべきに非ず。但し必ず発句の季に従ひ同季の句を以てすべし。

○第三の留字は、古来「て、にて、に、らん、もなし」等に限られをりしも、必ずしも拘泥すべきに非ず。但し附合の變化を促す初の句なれば、主として連用形或は助詞、助動

詞を用ゆるやう心掛くべし。

注六 座談会「柳田先生の俳諧」(「俳句研究」昭和三十七年十一月)で「東北車中三吟」を回想した土岐善麿の発言など参照。その中の一つ「赤頭巾の歌仙」の自注をみると、気心がわかつている折口信夫の付句には酷評を下したりしている。
(しまもと しょういち・文学部講師)

日本文学誌要 第四五号 目次一覽

〔論文〕

母の手——『万葉集』の象徴的喩法——

浜田 弘美(二)

〈小舎人童〉の出現

——『和泉式部日記』を中心に——

大谷 裕昭(二三)

『平家物語』における清盛像(下)

李 碩浩(二六)

語りの力(その一)

——「平家」語りにおける

〈音と声〉における存在力——

谷口 卓久(三七)

踊子の「闇」への封印

——「伊豆の踊子」論——

前田 角藏(五三)

国民童話と「御伽草紙」

——戦時下の太宰治——

宮下今日子(六九)

〔随想〕

開かれた言葉を

西田 勝(六八)

〔書評〕

杉本圭三郎全訳注『平家物語 全訳注』

麻原 美子(八二)